

琉球の方言 3巻 : 宮古大神島

法政大学沖縄文化研究所

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言

(巻 / Volume)

3

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

176

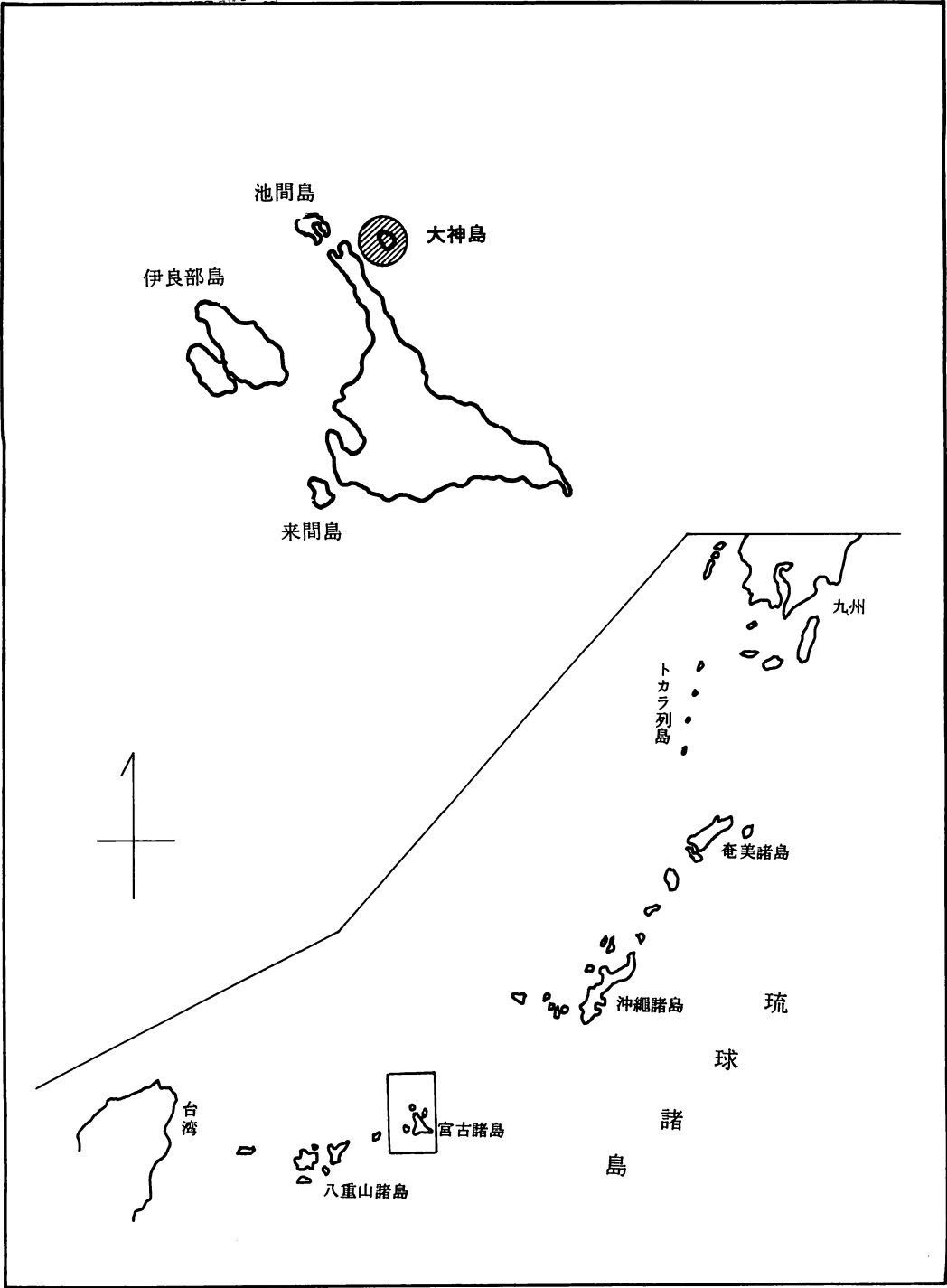
(発行年 / Year)

1977-12-20

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012775>

大神島の地点図



は じ め に

琉球方言は日本語の中にあつて本土方言とは異なる諸特徴をもっている言語である。その特異性を生み出した要因として、島嶼という地理的条件をあげることができる。すなわち南海の島嶼には本土におこつた時代ごとの言語変動の影響がそのまま伝播していかなかったために、本土における歴史的な言語変化の波からはずれてしまった面をもっている。たとえば、本土では、はやくに失われたへ行 p 音や、室町末期に起こつた活用語の連体形と終止形の同化作用という大変動や、係り結び法の消失など、これらは、中央語における歴史的な言語変化の現象としてあげることができるが、この現象は、本土のあらゆる方言をまき込んでいった。ところが、琉球方言では本土のように中央語の歴史的な言語変化の波をかぶらずに、これらの古形をいまだにとどめ、あわせて多くの古語もよく保存していて、その特異性をあらわしている。

古い相もさることながら、いま一つは、島嶼という条件によって、琉球方言の内部において新しい個別の言語変化が深化していったために、その特異性をさらに深めていっていることである。無気喉頭化音と有気非喉頭化音との対立、宮古方言の f・v の発生などがそれである。

このように、古い相と新しい相をもつ琉球方言は、奄美、沖縄、宮古、八重山、与那国の諸方言の特徴を生み出し、これらはさらに小方言に分化し、島ごと、集落ごとの方言にまで細分されているのである。これは、あたかも日本語の変化の可能な限りの方向性を示しているかのようでもある。このような小方言を生んだ琉球方言の諸変化は、本土方言では観察できない多くの言語現象の観察を可能にしてくれる。これ

らの現象を比較検討することによって、琉球方言の変化過程をあとづけることが可能であり、ひいては日本語の変化過程の全体像をえがくことも可能となるだろう。そのための現存する諸方言の資料を整えることが急がれる。

日本語の一分枝として存在している琉球方言は、いま、試練の時機に直面している。すなわち、交通機関の発達によって島嶼という条件は克服されつつあり、また、マスコミの発達によって琉球方言の特異性も失われつつある。これは、工業化・情報化社会における必然的な趨勢とはいえ、大いなる文化遺産の消失を意味するものであり、文化史的に貴重な資料が失われることになる。

このような状況にあつて、法政大学沖縄文化研究所では、琉球方言の実態をできるだけ広範囲にわたって収集し、少しでも多くの言語資料を後世に残していくことを責務の一つと考えるものである。

琉球方言の資料を収集するにあたって、次のような計画をたてた。

- (1) 奄美諸島から与那国島にいたる琉球全域の言語実態を、地理的にも、言語的にも、できるだけ広範囲にわたって記述する。
- (2) 調査は、年に一地点に限定し、その地点の言語現象をできるだけ多く記述し、年々その成果を積み重ねていき、ある時期にこれらを集大成する。
- (3) 調査では、臨地してその方言を簡略音声記号で表記収集し、できるだけ分析しない生の言語資料を得るようにする。
- (4) 調査は、外間守善・屋比久浩・中本正智・内間直仁・野原三義・加治工真市の所員・研究

員が適宜担当する。

(5) 一年ごとの調査結果をまとめる。

昭和51年の調査対象地点は、沖縄県宮古郡平良市大神島である。大神島は琉球諸島の南部地域にあたる宮古諸島の中の一島である。

大神島は20軒たらずの小規模な集落にささえられている。小規模の売店が2軒あり、日用品を売っている。旅館も民宿もなく、外来者には不便である。大神島の産業は主として漁業である。毎朝、新鮮な魚があがる。大神島は小島ではあるが自給のための耕地もある。戦前はさとうきびも植えていた。製糖期には、宮古本島の狩俣までさとうきびを舟で運んだ。

大神島には電気はあるが、島の人たちの協力による自家発電である。水道はなく、天水と井戸水を併用している。行政的にもっと便利な島にしてほしい。

夜の底に沈んでしまったかと思まごう大神島、そこにふりそそぐ星くずの夜空は美しい。

夜の11時に自家発電の灯が消え、調査が自動的に打ち切れ、眠るまでのしばしを、夜空をみあげてすごす。

大神島の言語調査を実施するにあたっては、区長狩俣秀雄氏をはじめ、島の多くの方々からお世話をいただいた。久貝カマドさんは調査員の宿泊のために一家を開放してくださった。このように、島の方々のあたたかいご協力によって調査を実施することができた。ここであげる言語資料は、すべて島の方々のおかげによってできあがったものである。ここに記して感謝いたします。

大神島の言語調査は、昭和51年7月から8月にかけて実施した。調査員は、中本正智・内間直仁・野原三義・加治工真市・名嘉真三成であ

る。

大神島方言の話者は次の方々である。

島尻	メガ氏	(80歳)
仲地	仁儀屋部氏	(80歳)
久貝	カマド氏	(73歳)
下地	豊吉氏	(60歳)
下地	仁吉氏	(57歳)
狩俣	千代氏	(55歳)
狩俣	喜一郎氏	(53歳)
狩俣	秀雄氏	(52歳)
狩俣	英吉氏	(51歳)
狩俣	ハル氏	(51歳)
伊差	ツル氏	(47歳)
友利	博吉氏	(45歳)
仲地	定雄氏	(42歳)
久貝	源徳氏	(36歳)

以上の方々は、大神島方言のために、お忙しい中を時間をさいて教えてくださった。心から厚く御礼を申し上げます。

今回の調査実施と、まとめは次のように分担した。

音	韻	加治工 真 市
語	彙	中 本 正 智
文	法	内 間 直 仁
(動詞・助動詞・代名詞)		
文法(形容詞)		名嘉真 三 成
文法(助 詞)		野 原 三 義

昭和52年6月

法政大学沖縄文化研究所 言語班

代表 外 間 守 善